

妖怪のお話をさせて戴きます。

所謂化け物話でございますが——この化け物と申しますもの、ひと頃は一段低いもの、下賤なものとして扱われておりましたようでございますな。

文明開化からこつち、お化け語るは無知蒙昧、化け物論ずるは品性下劣と、決まっておったような次第でございます。偉いお方は馬鹿馬鹿しいとお顔を顰め、賢いお方は子供騙しの戯言と、鼻で笑って相手にしない、それが世間様の通り相場でございます。

いずれにしても長い間ごんざいな扱いを受けて参りましたものでございますが、最近はそのうでもなくなりましたようで——例えば学問の分野などでも真面目に取り上げるむきが増えて参りましたようでございますな。

これはまことに結構なことでございますしよな。何であつても真面目にやるてエのは結構なことでございます。結構なことではございますけれども、お化けが持て囃されますてエと、それはそれで困つたこともある訳でございます——。

いやはお化けの評価が上がつたのではなくつて、世間様のレヴェルの方が下がつちまつたのじゃあないかと思われるようなことも多々ございますすな。

中にはこんなことをお尋きになる方もいらつしやいます。

「妖怪つてのは、本当に居るんでしようかな——」

これは返答に困つてしまいますな。

ホラー映画だとかテレビの心霊特番だとか、昨今そうしたモノが流行つてもおりましたよから、まあ仕方がないことなのかもしれないけれども、妖怪なんてえものは未確認動物じゃあないんですから、居るか居ないかと問われましても、これ答えようがございません。尤もツチノコだつてチュパカブラだつて居るんだか居ないんだか判りやしませんから、答えようがないのは一緒なんですございますが。

それでもUMAの場合、

「居ねーよ」

「居るつて」

と云う議論が、まあ多少はできましよう。ところが妖怪の場合は、これ、するだけ虚しいですな。居るとか居ないと云う言葉がどうも似合いません。

どうしてだろうとつらつら考えますに、そもそも妖怪と申します言葉は、単に怪しいと云うだけの意味の言葉だつた訳でございます。ようけ、などと読んだりも致しまして、これは奇ッ怪だの怪異だのと意味は変わリません。そうなりますてエと、居るも居ないも筋違いと云うもんで。まあ、小難しいことを申しましても始まりませんが、要するに怪しいモノゴトと云う意味だつたのでございます。

ただ、江戸も半ばを過ぎました頃に、化け物てえモノが出来上がりましてね、これは、まあ滑稽なもんでございますよ。まあお子様の玩具、要するにお化けでございます。それを洒落者が気取つて妖怪と書き表したりも致しましてね。ただ、これにはちゃんと、ばけもの、とルビが振つてありましたな。

それから文明開化を過ぎますと、無知やら蒙昧やらが馬鹿にされる時代がや
つて参ります。井上圓了博士なんて偉い先生がオカルトを糾弾いたしますな。た
だ当時はオカルトなんて云う便利な言葉がない。そこで、今で申しますところのオ
カルト迷信あたりを一緒に致しまして、妖怪と呼んだのでございますね。

でもって大正昭和と過ぎまして、民俗学だの民俗学だのと申します学問が生まれ
ましてね。おっと、民俗学と申しまして夜の巷に繰り出して安いお店を探そう
な学問じゃあございませぬ。民俗の二文字をご覧になりますと、すぐにそっち
の方を思い浮かべられるお方が多くいらつしやいますけれども——こうしてみます
と、民俗でエ言葉も随分とズイブンな扱いを受けておりますな。

妖怪の場合も同じでございますが。

その民俗学の、有名な柳田國男先生あたりが妖怪でエ言葉を使い始める訳でござ
いますな。田舎に伝わる怪しいモノゴトなんかをそう呼んだ訳でございますが、
これが——混ざります。

ええ。江戸の化け物あたりから、明治大正昭和と、ぐちゃつと混ざりまして、そ
のうち漫画なんかになったりしますな。そうして、怪しいだけの意味しかなかった
妖怪と申します言葉が、妖怪さん、妖怪ちゃんになつちやつた訳でございます。

キャラクターと申しますのでしょうか。

はあ、こうなりますと、居るの、居ないの、てエ話にもなつて参りますでしょう
かな。妖怪ちゃんつて居るの——と、尋きたくもなろうと云うもの。

身も蓋もない云い方を致しますと、妖怪なんてものは存在致しませんな。居ませ
ん。かと云つて、まるきり居ないと云う訳でもございません。私達が申しますとこ
ろのキャラクター、妖怪ちゃんと申しますのは、まあ、現象を伴つた概念でござい
ますな。そう云う形で居る訳でございます。このお話でも、まあそう云うお約束に
なつておりますな。

解り難い？

解り難いでしょうなあ。

例えば数字の1を思い浮かべて戴けましょうか。1と云う概念は慥かにありまし
ょう。しかしこの世に1と云うモノは存在しませんな。妖怪はこの1と同じでござ
います。この1に人格を与えたとします。まあお話でございますから、1はぼやい
たりしますな。

「オレはいつも一人だ。二人になつた途端に2になつちまう——」

何ともくだらない話ではございますが、これからお話し致しますのも、この類の
くだらないお話でございます。

舞台は江戸の終わり頃。厳密に申しますと、その頃妖怪はおりませぬな。否、先
程申しました通り、妖怪という言葉はございましたが、現在とは違う意味で使われ
ておりました。でも、現代の私どもが見聞き致します、しかもくだらないお話でござ
いますから、細かな時代考証をしても始まりませぬ。解り易く妖怪で纏めさせて
戴こうと思う訳でございますけれども——。

その昔――。

江戸郊外のとある廃屋はいおくに、一匹の妖怪ばけものが棲すみついでおりました。

棲すみついでいたと申しましたが、先程からくどくど申し上げております通り、妖怪ばけものでございますから、これは実体がある訳ではございません。妖怪ばけものだけに廃屋はいおくに取り憑ついていた――と申し上げた方がよろしいのでしょうか。その方が雰囲気的にはようございませぬけれど、そう云う風に申しあげますと、それはそれで誤解ごまかを招まねく惧おそれがございませぬ。

地縛靈じばくれいだとか浮遊靈うゆうれいだとか、そうした妙なモノと混同こんどうされては困る訳でございます。このお話は、まあ与太話よたわではございますけれども、取り敢あえずそうした嘘うそつぱちの、いかがわしいオカルト話わではない訳でございます。

この場合――廃屋はいおくに棲すみついでいたのは、やはり擬人化ぎにんかされた概念がい念、とお考え戴おんけますまいか。お話に出て参まゐります妖怪ばけものの方もそのへんは心得たものでございまして、おのれがそうしたモノだと云う自覚じかくをちゃんと持もっております。自分は形かたちを持つてこの世よに存在そんざいするモノでもなければ、靈魂れいこんのような超自然ちじぜん的な存在そんざいでもない、妄念まげんやら駄洒落だじゃれやら自然現象じぜんげんじょうやら、そうした概念がい念が寄り集あまって名前なまえを持った、所謂すいじゆ想像上じやうざうじやうの産物さんぶつなのだと、妖怪ばけものさんの方も十二分に承知じやうちしておるもの――とお考えください。

妄念まげんはともかく、駄洒落だじゃれとは何なんだ――と仰おついますな。この辺へんはおいおいお解とり戴おんけるようになっております。

さて、その廃屋はいおくに棲すみついでおりました妖怪ばけものでございますが、名なを豆腐小僧とうふこぞうと申まします。

小僧こぞうと申まします以上、姿形すがたがたは少年せうねんでございます。少々頭あたまが大きくて、笠かさを被かぶっております。手てには大抵たいていお盆ひらを持もっております、盆ひらの上うへには紅葉豆腐もみぢとうふが載のっております。

この豆腐小僧とうふこぞう、江戸後期えどこうきの絵草紙えくさしやら歌留多かるとやらに頻繁ひんぱんに出て参まゐります。当時はやけに人気にんきのあつたキャラクターだったようでございますな。

しかしこのお化け、人気にんきだけはあつたものの、ただ豆腐とうふを持もつて立たつている小僧こぞうだと云うだけで、取り立てて何なにをするでもない云う妖怪ばけものでございます。

怖おそがらせるとか、人を困こまらせるような悪あくさをするとか、そう云うことは一切いっさいございません。そもそも脅おそかそうと思おもえども、容姿ようさが容姿ようさでございますから、出て来たところところで脅おそかすまでには至いたらないと云う、至いたつて情なさけけないお化けでございます。その所せい為いか、絵草紙えくさしやら双六すわろくやらでは善よく見みかけたものの、実際じっさいに出会あつた者はまづないと云う代物しろものでございます。

この豆腐小僧とうふこぞうが、このお話お話しの主役しゅやくなのでございます。

＊

＊

その一 豆腐小僧、情事を目撃する

小 豆
僧 侶

そう云う訳でこの豆腐小僧、自分がいつからこのあばら屋に棲みついて居るものか、その辺はとんと記憶にございません。以前はもつと繁華な場所に居たような気もするのでございますけれども、それとても夢の中の思い出のようなもの、もやもやと致しまして一向にはつきり致しません。

それもその筈、この手のメディア妖怪は同時多発的に色々な場所に出現してなければなりませんから、どこに居たのかなどと云う記憶は当然持っていないのでございます。刷り物が流通している間は、それを眼にした人の頭の中にいちいち湧かねばなりません。人氣が一段落して、人々の記憶の隅に追いやられて初めて、安住の地を得られると云う具合でございます。

何故かと申されますか？

例えばもの本に、その何々と申す妖怪は古寺に出おり候——と記されていたとしてくださいまし。それを読んだ人の記憶の中に、何々と云う妖怪は古寺に出るのだそう——と云う情報が属性として残る訳でございます。そうすると、その妖怪は時間を遡って、昔から古寺に居たと云うことになってしまふのでございますな。

そこは概念でございますから、時間に対しても遡行性がある訳でございます。

ですから、豆腐小僧がこのあばら屋に棲みついたのは——ずっと昔のようでもありませんが——もしかしたら昨日のことなのかもしれないのでございます。いや、ずっと昔から棲んでいたと云う記憶を持った状態で、ついさつきこの場所に湧いたのかも知れないのでございます。

豆腐小僧は、ぼんやりとそんなことを考えておりました。

相も変わらず飽きもせず、豆腐小僧は紅葉豆腐を持っております。腐りもしないところを見ると、これも並の豆腐ではないのでしょうか。

つまりはこの豆腐も己の属性のうちなのだろうな——と、そんな風に考えますと豆腐小僧は複雑な心境になって参ります。そこでこの豆腐をば、ぱつと手放してしまつたならば、自分はいったいどうなるのだろうと、そんなことも考えたり致しません。

——ただの小僧になるのか。

それとも。

——豆腐諸共消えてしまふか。

後の方が確率は高いだろうと、豆腐小僧はそんな風に考える訳でございます。何故なら、ただの小僧などと云う妖怪はいないと、そう思ったからでございます。そう考えますと、盆を持つ手にもつい力が入ってしまします。もし手放してしまつたり致しますと、その瞬間にアイデンティティーが雲散霧消してしまふかもしれない訳でございますから、これは無理もございませんまい。

そして――。

それまで気にはしていなかったのですが、善く見てみればどうやらこの廃屋は元豆腐屋のようでもありました。なる程人氣がなくなつて、寂れた豆腐屋に
出る妖怪と勘違いでもされたのかと、豆腐小僧は納得致します。

――そうではないのに。

豆腐小僧本人の記憶が確実なら、豆腐小僧はそんな妖怪ではなかった筈なので
ございます。

左前になった豆腐屋の怨念が形を得たものでも、うち捨てられて古びて朽ちた豆
腐作りの道具が化したものでもございませぬ。豆腐小僧は豆腐小僧として、ポンと
生れた筈なのでございます。

それに――。

これは少々怪しげな記憶なのでございますが――自分は数ある妖怪の中でも取
り分け名門の出なのだ、そんな覚えもあつたのでございます。

――とは云うものの。

豆腐小僧の親でございすから、雁もどき入道とかオカラ爺イとか、思いつく
はその程度。そんな妖怪は聞いたこともございませぬ。それに、もしそんな妙竹林
な妖怪が居たのだとしても、到底名門とは思えない巫山戯た名前ではございませ
ぬか。

――気の所為なのかもしれぬ。

豆腐小僧は溜め息を吐きまして、壊れた籠の横に腰を下ろしたのでございます。

勿論、お盆は確乎りと持つております。

仮令お化けでも、一旦湧いてしまひますてェと、消えてなくなるのは気持ちのい
いものではないようですな。それに豆腐小僧は、何しろ小僧でございすから、そ
れ程達観もしておりませぬし、度胸もないのでございます。

とは云うものの――。

誰も居ない廃屋の中で豆腐を持つてじつとしているだけの思いつきり無意味な存
在などに、果たして存在価値があるのでございませうか。今ここで豆腐小僧が綺
麗さっぱり消滅してしまつたとしても、どなた様も困りませぬな。いいえ、困るど
ころか、消滅したことですら気づかないことでありませう。

――ならいつそ消えてしまふか。

そうも思うのでございますが、矢張り思い切りがつきませぬ。そこで思い切りが
つかない原因と云うのを、更に豆腐小僧は考える訳でございす。

破れ戸から覗く表の景色は、徐々に茜色に染まつて行きます。

所謂黄昏刻と云うやつでございまして、これはお化けの時間と云われておりま
す。道で行き合う相手の顔が、朦朧模糊として参りまして人だか魔物だか判別出来
なくなると云う刻限でございすな。まあこうした刻限でございすから、小僧も
意識を持つたのでございす。それで要らぬことを考える訳でございす。

――矢張り血縁か。

あれこれ考えた挙げ句、小僧はそんな小生意気な結論に思い至つたのでございま
す。

記憶の底の方に、ほんの一寸だけ、汚れのようにこびりついている臃げな肉親の思ひ出が——自分を現世に引き止めているのではないかと、そんな風に思ったのでございましょう。

——しかしなあ。

妖怪に親も子もないだろうと、それはそうも思うのでした。そもそも狸の親は狸、狐の親は狐。その考え方で行くならば、豆腐小僧の親も豆腐小僧でなくてはなりませんまい。

しかし小僧が小僧を産むと云うのもどうかと思いますし、小僧のメスと云うのもこれまたどうかと思います。つまりは豆腐小僧と云うのは種ではなく個体としての特性なのか——と、小僧は頭を悩めるのでございます。

頭を悩めたところで、豆腐を持っております手前、その頭を抱える訳にも参りません。片手で持つても良さそうなものではございますけれど、そこはそれ、もしもこのことを考えますと、少々怖いのでございましょう。

こう頑なですと、例えば鼻の頭が痒くなったりしたらいつたいたいとするのだろうと、要らぬ心配もしてしまいますな。

実際小僧はもともと小鼻を動かしたりもするのでございますが、未だ痒いと云う感覚を知りませんから、そのあたりは平気なようでございます。豆腐小僧には痒がると云う属性は付与されていないのでございます。

——家中で笠被つて。

馬ッ鹿じゃなかるうか。

とうとう小僧も捨て鉢になつてしまいます。とは云うものの、この場合どうすることも出来ませんから、笑つてみたり致します。解決の糸口すらないのでございますから、笑うくらいしか打つ手がございませんな。絵草紙の豆腐小僧は善く笑つておりましたから、笑う方は大丈夫なのでございます。

「けけけけ」

虚しい笑いとはこのことでしょう。何と申しましても、虚無そのものが笑う訳でございしますから、これは仕方がございませぬ。

「ひひひ」

ものはついでと云うやつで、もうひと笑い致します。

その時でございします——。

「誰か——居るのじゃアない——」

女の声でございします。

「——何だか笑い声が聞こえたよう」

「なあに気の所為だ——」

続いて男の声でございします。

「——この豆腐屋は、モウ人が寄り付かなくなつて三歳も経つ、見ての通りのあばら屋だ。何か居たとしたつて、そりゃ人じゃあないよ。居るのは豆腐を嘗める舌出し小僧くらいのものさアね——」

——舌出し小僧？

豆腐小僧、慌てて今まで引込めていた舌をべろりと出しますな。

そう云えば昔はいつも舌を出していたような気もしたのですな。
それで——。

——豆腐を嘗めていたのだったけ。

思い出したものの、今更嘗める気はしなかったようでございます。

「それだって、好物の豆腐がないんだからね。この荒れようじやア、ここにもたぶ
ん居るまいよ。サアサアそんなところに突つ立っていたんじやあ人目につかアな。
さつさとこつちへおいでな——」

ガタガタと建具の軋む音が致しまして、やがて破れ戸がガラリと開いたのでござ
います。傾きかけた夕日がすうと差し込みます。

若い町娘の手を引いた、若旦那風の男が、逆光の中に立っております。

豆腐小僧、慌てて竈の陰に隠れますな。しかし別に慌てる必要はございません。
何故なら、概念であるところの豆腐小僧は物理的な質量を持っておりません。何か
現象を伴うタイプの妖怪でもないため、小僧は不可視な存在、人間の目にはまっつ
く見えないのでございます。

ですから概念として理解されて初めて人の脳裏に像を結ぶと云う——豆腐小僧は
そうしたタイプの妖怪なのでございます。

それは小僧本人が十分に承知している筈のことなのでございます。それでも一応
隠れてみましたのは、拙いながらも自我が芽生えているからで、これはまあ、一種
の習性と申しますか、小僧の臆病なる性質のなせる業と考えるよりありませんでし
よう。ならば一概に馬鹿と責めるのは可哀想でございましょうか。

ともかくにも豆腐小僧は、そつと竈の陰に身を潜め、突然の侵入者の様子を窺
いますな。大きな頭に笠を被っておりますから、もし見えていたならば、これは丸
見えてございます。そのあたり、気づかないのは御愛敬でございましょう。

——何だろう。

男の方はもう、何だか眼が血走っております。女はと云えば何だか顔をあさつて
の方角に向けて、ソレ若旦那、早う戸を閉めておくん——などと鼻声を出してお
ります。豆腐小僧は更に視線を送りますな。

この辺で——もし敏感な人間でしたら、何か感じる訳でございます。

勿論豆腐小僧を知らないお方は何にもお感じにならないのでしようし、もし感じ
たとしても、

やな感じ——。

程度のものでございましょう。

しかし、この若旦那のように、豆腐小僧の情報を——仮令それが間違つた認識で
あったとしても——確乎りと持っている人間の場合は、また話が別でございます
な。特にこの男の場合、豆腐小僧本人よりも豆腐小僧に詳しくかつた訳でございます
から——。

この若旦那、豆腐小僧は潰れた豆腐屋に出るお化けだと云う、まあ誤つた情報を
頭から信じ込んでいた訳でございますな。豆腐小僧自身は気がついておりませんけ
れど、豆腐小僧が今日ただ今この場所に湧いたその訳は、多分この男がそう信じて
いたからに違いないのでございます。

妖怪なんてものはそんなものでございまして、主体性でエものがないんでござい
ますな。見る者の方にこそ主体がある。これこれこうじゃろうと思う者がいれば、
そうなってしまう。否、こうなのじゃと思われればそうなってしまう。誰も何も思
わなくなれば消えてしまいますな。

とにかく、そうした情報を持った人間の場合は、例えば、

ト、豆腐小僧が出たァ——。

と大袈裟に怖がりたり致しますな。こう云う場所にはそういうモノが出ると思い
込んでいる御本人な訳ですから姿など見えなくても怖くなってしまふ訳でございま
す。まあそこまで臆病じゃアなくツとも、

本当に居るのかよ、おい——。

などと、やや不安になるくらいは致します。もそつと肝の据わった理性的な方の
場合でも、

馬鹿らしい、あんなものは作り物だ——。

と打ち消したりしますな。

これだけ小僧が注視しているのでございますから、そのくらいの反応はあつても
良さそうなものでございますな。

ところが、この若旦那、もうすっかり鶏冠とさかに鼻血が昇っておりまして前後不覚。

そんな、昔絵草紙で見かけたマンガ妖怪のことなど忘却の彼方でございます。気配
を感じるどころか、涙なみだを引つ掛ける様子もございません。

失礼な男でございます。

若旦那、馬たてが太鼓たこを叩くような鼻息で、ただお玉ちゃんお玉ちゃんと連呼して娘
の帯を解きにかかりますな。

娘は娘でいやよいいや、よしてよ旦那——などと云いながら、腰は浮かす躰からだは
回すとやけに協力的でございます。

小僧は何が起きているのか善く解っておりませんから、身を乗り出して凝視ぎょうし
致しますな。やがて、娘の真ツ白い玉の肌が露あらわになります。若旦那の方へと云えば、
鼻息はいつそう荒く、視野はいつそう狭くなりますな。

小僧はもう籠の陰なんぞにはおられませぬ。出て来ております。大きな眼を皿の
ようにして見入っている訳でございます。何しろ己の何たるかすら不確かな小僧の
妖怪、男と女の睦みごと、情事を目の当たりにしたことなどございませぬ。初見学
でございます。それでも盆だけは持つている訳でございますが——その盆を持つ手
にもつい力が入ってしまいます。

そのうち。娘の白い腿が、指が、若旦那の貧弱な背中やら腰やら、あれよあれよ
と——。

——何をしているのだ？

豆腐小僧、思わずずいと前に出ますな。若旦那とお玉ちゃんはもう、組んずほぐ
れつ玉の汗でございます。

——どうやら。

狼藉ろうぜきを働いている訳ではないようだと言うことだけは辛うじて判りましたから、
小僧は安心し、且つ首を傾げますな。

豆腐小僧はその辺のすれた童なんかより余程純粹でございます。余計な屬性やら知識やらは、見事なまでに持っておりません。

そこはそれ、豆腐を持つて立つているだけの存在なのでございますから、斯様な濡れ場に遭遇致しましても、何が行われておりますものかまるで理解出来ないのでも、怒つてもいない。ただ、獣や化け物相手ならいざ知らず、そこは人間同士のこととございますから、流石に取つて喰らうと云うような切羽詰まった事態ではなからうと、それはそうも思うのでございます。

はてさてこれなる不可思議な律動は如何なる類の感情表現であるか――。

小僧は、己の姿が見えないのを良いことに二人の真ん前に出ますと、しゃがみ込んで喰い入るように見始めますな。一方若旦那とお玉ちゃんの方は気にも致しません。それはそうでございましょう。幾ら近くにいようと、相手は見えも触れもない〈概念〉でございます。しかも豆腐を持つて突つ立つている子供と云う、何とも無意味な〈概念〉なのでございます。

そんなモノが自分達の痴態を凝視しているなど、これは勿論想像の外、理解の及ばぬ非常識でございます。怪しめと云う方が無理な相談でございましょう。

と、申しますより、この二人、もういいところに差し掛かつておりますようございますから、仮令本物の出歯亀が覗いていようと、中断はせなんだろう、とは思われるのでございます。

女の白い脚が高く上がりますな。

張りのある太股から艶めかしく描かれた曲線をなぞりまして、脛、括れた足首へと、小僧は視線を移動させます。

そうして見ておりますうちに、小僧の頬はほんのりと赤らんで参ります。

これは所謂当てられた状態と云うのとは少しばかり違つております。羞らつている、照れている、いずれも外れておりまして、これは例えば幼子が物事に集中しますと呼吸を忘れてしまつたりする、そう云う状態に近いのでございますな。

豆腐小僧は息を止めておりました。

ここで、疑問を持たれる方もいらつしやいますでしょうな。豆腐小僧つてのは概念なんじゃないのか、概念が呼吸をするのか――と。

呼吸は――するのでございます。豆腐小僧は〈小僧〉でございます。絵姿などを見ましても、顔の真ん中にはちゃんと鼻がついております。これは、この妖怪は呼吸もするし涙もかむと云うことを表しております。

勿論、妖怪は生物ではございせんから、生命活動を維持するために呼吸をする訳ではございせん。呼吸をしていた方が自然な形状を与えられた場合に、呼吸する方が自然だから呼吸するだけ――でございます。

火を吹いたり垢を嘗めたりすると同じようなものでございましょうな。人を喰つたりする化け物も多くいる訳でございますが、それだつて同じこととございまして、喰つて栄養にする訳ではございせん。器物系の妖怪でございまして、手足や目鼻が付加された段階で、これは獣や人に見立てられている訳でございまして、呼吸くらいは致します。

ただ——傘お化けのような形状の妖怪に関して申し上げますなら、これは呼吸するかどうかは甚だ怪しい、と云うことになりましようか。

何と申ししても傘お化け、鼻の在処も定かではございませんし、骨と紙ばかりで中身は空でございませうから、吸ったところで構造上溜める処もないようでございます。そうした形状で世間一般に認知されております以上、これは呼吸しない、あるいははしくても差し支えないと、そう云うことになりましよう。

豆腐小僧の場合は完全に人間状の妖怪でございます。鼻もあるなら穴もある、きつと肺もあるのです。立派に呼吸も致します。呼吸する以上は、息を止めていれば苦しくもなりましようし、顔も赤くなるのでございませう。但し止め続けられても死ぬ訳ではございません。

そこはお化けでございますから。

まあ、小僧の頬は徐々に上気して参ります。

小僧よりお玉ちゃん、お玉ちゃんより若旦那の方が上気している訳ではございませんけれども——。

突如、お、お玉ちゃん、若旦那が気の抜けた声を発します。小僧は思わず顔を突き出し、豆腐を落としそうになって慌てて引きます。

白い豆腐がふるふると身を震わせます。

若旦那は一度軀を突つ張らせ、ぴくぴくと痙攣致します。毒でも効いて来たのかと、小僧は吃驚致します。むふうと鼻から空気が抜けて、若旦那は本当に萎れ、どさりとお玉ちゃんの肉蒲団の上に身を沈めます。

——死んだのだろうか。

小僧は確乎りと盆を持ち直し、もう一度覗き込みます。

若旦那の筋肉は、すっかり弛緩しております。顔は娘のたわわな胸に埋まっておりますから、表情も何も窺えたものではございません。それでもその貧弱な腰には、娘の二本の白い鞆そうな脚が、いまだ搦められているのでございます。

——喰われるのかしらん。

食虫植物——豆腐小僧がそんなものを知っているかどうかは判りません。

しかし小僧の脳裏にはそうしたイメージが浮かんでおります。

——これは男と女が戦っているのでも、巫山戯合っているのでもない、どう云う仕掛けになっているのかは判らぬが、間抜けな男が女の甘美な罠に嵌って、もがいていたところだったのではあるまいか——そしてたつた今、毒が男の全身に行き渡って、息絶えたのではないのだろうか——。

小僧はそう思っております。つまりこれから、すっかり痺れてしまったこの男は、娘にばりばりと喰われてしまうのではないのか——。

——お化けでなくとも。

人も人を喰うのか、と。小僧は固唾を呑んで見守ります。

——どうやって喰うのかしら。

そう云えばその昔、女は魔物だとか、女は怖いとか女に気をつけろだとか——そうした言葉を聞いた覚えもございました。勿論黄表紙だの草双紙だのに出演していた頃の、頁を跨いだ記憶でございませう。